

当社は創業48年目を迎える。父の後を継ぎ、私が社長となり、19年目になる。引き継いでしばらくして「会社を創った時、こんなに長く続くとは思わなかった」と父がつぶやいた。

当時、父が社長の時には出なかつた問題が噴出し「まったく後のことを考えていない!」と少しイライラが募っていたが、父の言葉で「創業者」を陸上競技になぞらえ理解した。

父たち「創業者」は、100メートル走だと思ひスタート。それが、200メートル、400メートル、やがて長距離となり、競技場を出てマラソン。疲れてきて「ああ、これは駅伝だったのか」と悟る。そして、そこから誰にタスキを渡すのかを考え始めるのか。

「中小企業家同友会」は、1957年に東京で誕生し、全国47都道府県、約4万4千人の会員を擁する経営者団体である。個人事業主を含む中小企業経営者と

その後継者、それに準ずるもので構成されている。58年前、なぜ「企業家」という名称を使って設立したのか、経緯はわからないが、私はこの言葉に引かれる。

う字は、背景に縦軸と横軸、つまり「広がり」と「歴史」を背負った字だと思ふ。いろいろな方から「企業は永続するのが原則」と教えられてきた。構成する従業員と代表、さらに大半の

ねてきたものを、次の世代に託していく。ところで昨今、後継者がいないことによる廃業が問題となっている。私は、この「後継者」という言葉に違和感を覚える。「後」の

「中継者」の方が妥当だと考える。後任を選び育て、次の「中継者」が、意気揚々とスタートできるよう準備することは、前の「中継者」の仕事である。

タスキを渡したとき「後には俺に任せろ!」とスタート。その背中を「頼もしい!」「あいつならできる」と感じながら送り出すことは、私たち「中継者」の夢だ。

当社に、父の創るものにあこがれて入社してきた者がいる。私たちも、この父親のように、まずは「あこがれ」、「目標」とされる「中継者」でありたいと思う。

私たちは「中継者」



やぎ 八木 ひとし 仁



「企業家」と「経営者」は同義語で「企業家」の「家」は「者」と同じ意味だ。しかし、武道家、茶道家などを継承する者を意味する。結婚式の看板「祝〇〇家」は、一族や家族全体を意味するが、夫婦・親子の綿々としたつながりも想像させる。さらに大きくなる

「家」とい「国家」だ。そこには「家」というものが、自分が積み重ねてきたものを、次の世代に託していく。

「中継者」ではなく、後任を選び育て、次の「中継者」が、意気揚々とスタートできるよう準備することは、前の「中継者」の仕事である。

「中継者」でありたいと思う。

私は「後継者」ではなく、

「中小企業家同友会」は、1957年に東京で誕生し、全国47都道府県、約4万4千人の会員を擁する経営者団体である。個人事業主を含む中小企業経営者と

私は「後継者」ではなく、
県中小企業家同友会代表理事。神奈川県出身。民間企業に勤めた後、1985年に熟成形加工のシンデン(本社・小山市)に入社、97年から社長。「成長戦略の根本は人」とし全社員を構成表で管理。先輩から後輩への技術伝承に力を注ぐ。小山高専地域連携協力会副会長。法政大卒。茨城県古河市在住、55歳。